41 つぶら実を日に照らさせて大富士の前に枝張る一本の柿

み ひ て おおふじ まえ えだは いっぽん かき

おのえさいしゅう
尾上柴舟

【歌意】

丸い大きな実を日の光に照らさせて、大きな富士山の前に枝を張っている一本の柿の木よ。

〈鑑賞〉

この歌は写真を思い浮かべるとよく分かります。背景に大きな富士山。その前に柿の枝が張り出して、丸いオレンジ色の実が日に照らされています。書家でもあった作者の、富士と柿の構図が印象的な一首です。

42 富士の山まぶるとき峯より裾むけに濃き秋の藍を刷きながしたり

ふじ やま う みね すそ こ あき あい は

おおたみずほ
太田水穂

【歌意】

富士山が舞を舞うとき、山頂から裾に向けて、濃い紅の藍の花の色をさつと塗り流したようだよ。

〈鑑賞〉

藍という植物は、「藍」色の染料となりますが、秋に咲く花は紅色の房状です。紅葉に包まれた秋の富士山を、紅色の衣の裾を引きながら舞う姿にたとえた一首です。

43 富士が根を片剥ぎにしてゐる雲の沈むともなし日の夕べまで

しまぎあかひこ
島木赤彦

【歌意】 富士山に神社の「千木」のようにかかっている雲が、夕暮れまでその

まま沈むこともない。

〈鑑賞〉

「片剥ぎ」とは、神社の屋根に載っている「千木」というX字型の木のことでしょう。和歌の世界では、「千木の片そぎ」として序詞などに用いられます。山頂にかかった細い雲によって、富士山がまるで神社の屋根のように見えるというのでしよう。その雲がかかったまま、静かに日が暮れていく情景を描いています。

44 この水は富士の忍水にして常湧く水の清きを飲まむ

くぼたうつぼ
窪田空穂

【歌意】 この水は富士山の地下水だ。ここにいつも湧いている。この清らかな

水をいただこう。

〈鑑賞〉

常にここに湧いている清らかな富士山の玉水をいただこう、という歌です。作者は他に「雪残る富士の裾野の若葉占め啼き遊ぶ鳥に我もまじりぬ」という富士山の歌も詠んでいます。

45 遠とおつあおうふみたいが大河くながるる国ななかば菜はなの花ふじさきぬ富士よをあなたに

よさのあきこ
与謝野晶子

【歌意】 遠江という、大河が流れるこの国の中ほどで、菜の花が咲いているよ。富士山を遠くに見ながら。

〈鑑賞〉

遠江は浜名湖の昔の名前です。その近くを流れる大河ですから天竜川です。地名から連想される浜名湖、そして目の前の天竜川、遠くに富士山、足元の菜の花——取り合わせの面白さのある一首です。日本を代表する女流歌人は富士山だけでも何首もの歌を詠み、天城湯ヶ島・久能山・日本平・用宗等、静岡県でたくさんのこの歌を遺しました。

46 ぶわじのねわのそわ「つわいはねにもゆるひのあかき」ろはしるひとなし

あいつやいち
会津八一

【歌意】 富士山の底の奥深くの岩に燃える火のように、赤い心は知る人もいない。

〈鑑賞〉

穏やかに見える富士山も底には溶岩が燃えているはず。同じように内面の情熱は他の人には分かりません。書道家としても知られた作者は、すべてひらがなで歌を作りました。漢字交じりの歌と違って、どんな印象を受けるでしょうか。

47

ふる雪をいまだ被らぬ不二の根の焦土膚はおこそかに見ゆ

川田順
かわたじゆん

【歌意】

降る雪をまだ被っていない富士山の溶岩に焼けた土肌は厳かな感じがするなあ。

〈鑑賞〉

雪が降れば全てが白く覆い隠されます。作者はその前の、富士山の土や肌に着目しました。溶岩に焼けた土の感じ。そこに大自然の力を感じているのです。

48

富士山を見れば新年の朝あけに雪かかむりて陳腐にあらず

斎藤茂吉
さいとうもきち

【歌意】

富士山を見ると、新年の朝焼けに雪を被った姿で、決して陳腐な姿ではない。

〈鑑賞〉

新たな年。富士山を見ると雪を被った姿が朝日に照らされ、美しく映えています。決して陳腐ではない昔ながらの雄大な富士山の姿がそこには在ります。作者は、「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる」「あかあかと一本の道とほりたりたまきわる我が命なりけり」等の歌で知られる日本を代表する歌人です。

49 自然しぜんのいかめしい意思いし！原始暴力げんしぼつりよくをひそめている富士ふじにうたれる

まえだゆうぐれ
前田夕暮

【歌意】 自然の厳かな意思！ 原始時代の暴力のようなどても大きな力を潜めて

ている富士山の姿に心打たれる。

〈鑑賞〉

「きよらかに月夜の富士はおはしけりふりさけみたる空のふかみに」という歌も詠んだ作者の口語自由律の富士山の歌です。とても大きな力を内在している富士山を詠んでいます。作者は一人で百首もの富士山の歌を詠んだ歌人としても知られています。

50 嵐あらしふく富士ふじの真木原夏まきはらなつまけて百鳥ももどりのきそうこえふ声あがは騰あがれり

きたはらはくしゅう
北原白秋

【歌意】 嵐が吹く富士山の木々の林は夏になって、多くの鳥が競いあい、奏であうように鳴く声があがっているよ。

〈鑑賞〉

「ちやつきり節」や「ペチカ」「この道」「雨々ふれふれ」などの作詞者としても知られている作者は、「不尽の山麗うららかなればわがこころ朗らかになりて眺め惚れて居る」という歌も遺しています。「ふじ」を、「不二」とも「富士」とも「不尽」とも表現した白秋の、鳥たちの声が聴こえてくるかのような一首です。